

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1760号 2005年01月04日(火)

明けましておめでとうございます。

東京の話で恐縮ですが、年末に大雪が降って以降は穏やかな正月でした。世界各地の元旦、それに日本各地の三が日はどうだったでしょうか。

ニューヨーク市場で一年が終わるまで、2004年がドル・円取引で変動相場制開始以来の最も小さな値幅で終わるかどうかに興味を集めていました。可能性があったのは、ダウンサイドでした。薄商いの中、ドルには予想通り売りが出て、確か102円台の前半までであった。

しかし、ドルは結局その102円レベルで2004年を踏ん張って、12月03日の101円83銭を下回らなかった。この結果、2004年はドル・円の高値は5月15日の114円90銭、安値が12月03日の101円83銭で確定し、その幅はわずかに13円07銭。

昨年最後のニュースでお伝えしたとおり、変動相場制開始以来2003年までで一番年間変動幅が小さかったのは1996年の13円27銭。2004年はこれを下回った。つまり、2004年は「変動相場制始まって以来最も狭い値幅の年」となった。

今年はどんな年になるのでしょうか。

米大統領選挙の年が小動きだったことも昨年最後のニュースで指摘しました。その後は1997年には年間20円93銭、2001年には18円54銭の上下の動きでした。まあ多少は値動きが大きくなる、ということです。今年もそうでしょうか。

筆者は昨年末自分のサイト (<http://www.ycaster.com/>) に、「2005年にもしかしたら起きるかもしれないサプライズ」として三つを挙げた。蓋然性は少ないと思っているが、僅かな可能性が残っている事項です。その一つとして、ブッシュによる大規模な為替調整を挙げた。レーガンが当時の対GDP比で3%を上回った貿易赤字の是正を目指してプラザ合意に動いたのは1985年。日本もドイツも「このままアメリカの赤字が増えるのは良くない。自国経済にも打撃あり」と判断して先進国が一致して動いた。現在のアメリカの貿易赤字は、対GDP比でははるかに当時を超えている。倍くらいである。

当時と今では環境の差はある。ブッシュは今でも「強いドル」を唱えている。かつ日独には今以上に自国通貨が上がって欲しいという欲求はない。これは85年と大きく違う点だ。しかしアメリカ国内にも「ドル調整」を主張する声はある。今のように株式相場が安定して、

アメリカへの資金の流入が続いている間は、ブッシュ政権は動かないと思う。しかし、多くのエコノミストが指摘するとおり、またグリーンズパンが警告するとおり、今のアメリカの対外赤字が「対米投資への不信感」を呼ぶ可能性はある。

あと私が「2005年のサプライズ」として挙げたのは、「北朝鮮の体制崩壊」と「小泉首相の政権投げだし」でしたが、いずれも起きたら結構大きなパーカッションがある。しかし私は、2004年の12月中旬に予想したとおり、プラザ並みの大きな為替調整は今年はないと考えているし、むしろ年後半にはドルの反発局面もあると考えている。年末・年始のドルの特に対ユーロに対する動きを見ていると、3%台半ばの成長が見込めるアメリカ経済には、一定程度の安心感がある。

いずれにせよ、今年一年間もよろしく。皆様にとって、2005年が良い年でありますように。

《当「ニュース」は、住信基礎研究所主席研究員の伊藤 (E-mail ycaster@gol.com) が作成したものです。許可なき複製、転送、引用はご遠慮下さい。また内容は表記日時に作成された当面の分析・見通しで一つの見方を示したものであり、売買を推奨するものではありません。最終的な判断は、御自身で下されますようお願い申し上げます》